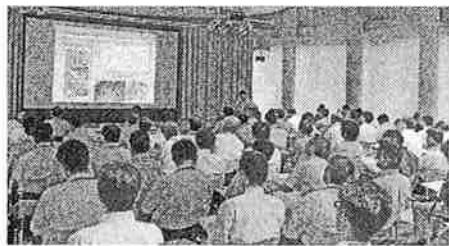


新潟県コンクリート診断士会は4日、「インフラの老朽化を考える」をテーマとするシンポジウムを新潟市立中央図書館で開いた=写真。増大する社会資本ストックへの対応として、予防保全型管理手法を取り入れた新潟県道路施設維持管理計画について、県土木部道路管理課の土田研一・計画安全対策係長が講演したほか、会員3名がインフラ維持管理の課題や補修事例をそれぞれ発表し、高度成長期に大量整備された社会資本の戦略的維持管理に向けて、コンクリート診断士の診断力を結集して対応すべき事柄について共通認識を醸成した。

この中で土田氏は、道路法等の一部が改正され、道路の老朽化や大規模災害の発生可能性を踏まえた道路の適正管理に向けて、予防保全の観点も踏まえた道路の点検を行うことが明確化されたと説明。さらに、維持管理は、新設に比べ、補修対象の選定など意思決定過程が利用者・納税者に見えづらいと指摘し、意思決定過程の“みえる化”により、住民への説明責任を果たしていくことが必要だと強調。さらに、県道路維持管



「インフラ老朽化を考える」テーマに
県コンクリート診断士会がシンポジウム開催

理計画について、予算制約の中で、安全性や目標達成状況、地域バランスなどを考慮しながら施策を進める必要があるため、データベースシステムやGIS(地図情報)を活用し、橋梁をはじめとする個別施設マネジメントから道路施設全体の総合マネジメントに移行しつつあることを説明した。

会員からの報告では、開発技建(株)の近藤治氏が「補修設計における課題」と題して発表。この中で、予算の平準化によって、補修工事が先送りされる場合、損傷が進行して、当初の予算では補修しきれなくなることを懸念し、補修の先送りによる補修費増加を予算の平準化の際に考慮すべきと指摘した。さらに、補修優先順位決定のポイントとして、「同じ程度の損傷の場合、進行が早い箇所から補修する」など4項目を挙げ、コンクリートは中性化より“塩害”の方が損傷の進行が早いことなどを指摘した。

このほか、「断面補修における課題」と題して、BASFジャパン(株)の中村博之氏が吹付工法とコテ塗工法の留意点を説明、融雪剤散布の影響が大きい高速道路の補修事例などを紹介した。

また、「県内の補修事例」をテーマに(株)レックスの小林徹氏が発表。県発注の橋梁補修工事で塩害対策として、鉄筋腐食抑制タイプのシラン系含浸材が使用されている事例をはじめ、注目工法について紹介した。

戦略的維持管理へ「診断力」結集